伊井地区の遺跡から

伊井地区に先史時代の遺跡が所在していることは古くから知られていました。

明治 28 年に金沢で組織された『北陸人類学会』の会誌に、早くも「加戸山朝鮮土器」「古屋石塚の田畔にて多く朝鮮土器を拾得」（会誌２ 1998）と記載されています。

大正 9 年に刊行された『福井県史蹟調査報告』には「弥生式土器及石器発見の遺跡」の章立ての中に、「清間及び伊井遺跡」の章を見ることができます。同報告には、「加戸山古墳」について明治 15 年の発掘で「金属環（主として銀環）六個破片二個勾玉二個他に祝部土器多数あり」「現今東京帝室博物館に所蔵」とされてもいました。

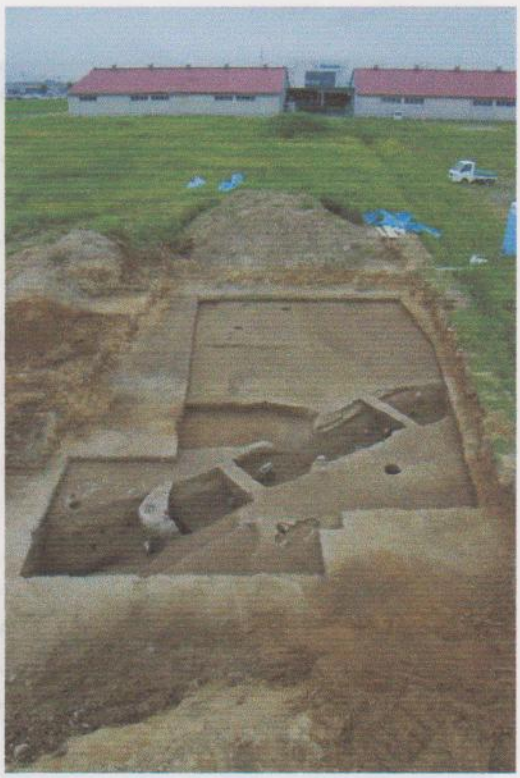
『伊井村誌』（1954）には「八皇子山古墳」を始め「伊井塚山古墳」など矢地集落周辺の北方山麓に分布する古墳についても記述され、竹田川が形成した自然堤防上の先史時代集落とその北方山麓に展開する古墳群は、郷土の黎明を物語っています。

このような伝統に育まれた伊井地区において、旧金津町はその一画を自然と開発との整合性を保ちながら職住近接型の活力あるまちづくりをめざす「工業振興ゾーン」として設定、「金津中部工業団地」の造成が進められました。そうした施策は遺跡の損壊を招きかねない側面もあり、平成 2 年伊井遺跡第 1 次発掘調査を皮切りに記録保存のための発掘調査が続けられてきました。

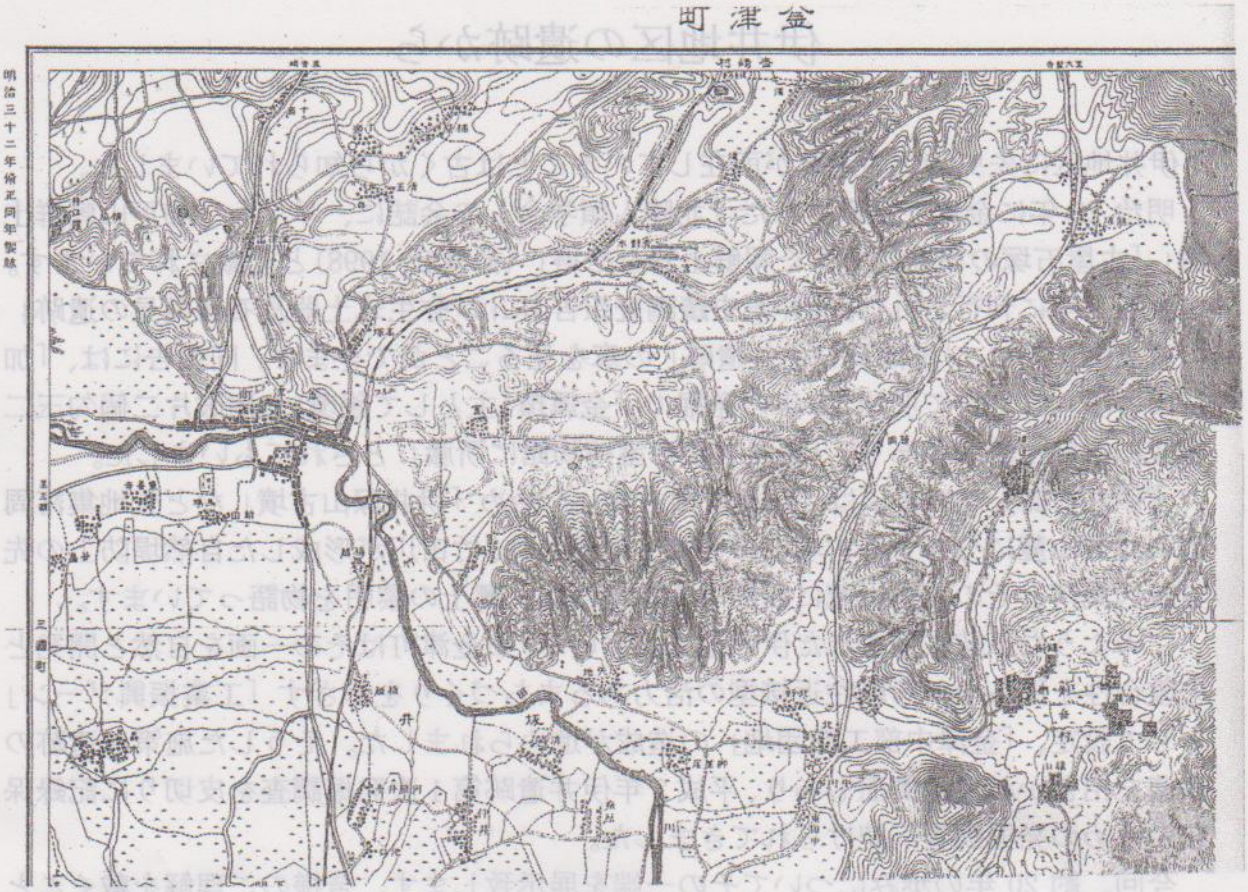
今回、約 20 年の歩みについてその一端を展示致します。皆様のご理解を戴くことができますれば望外の喜びとするものです。

平成 25 年 8 月 10 日

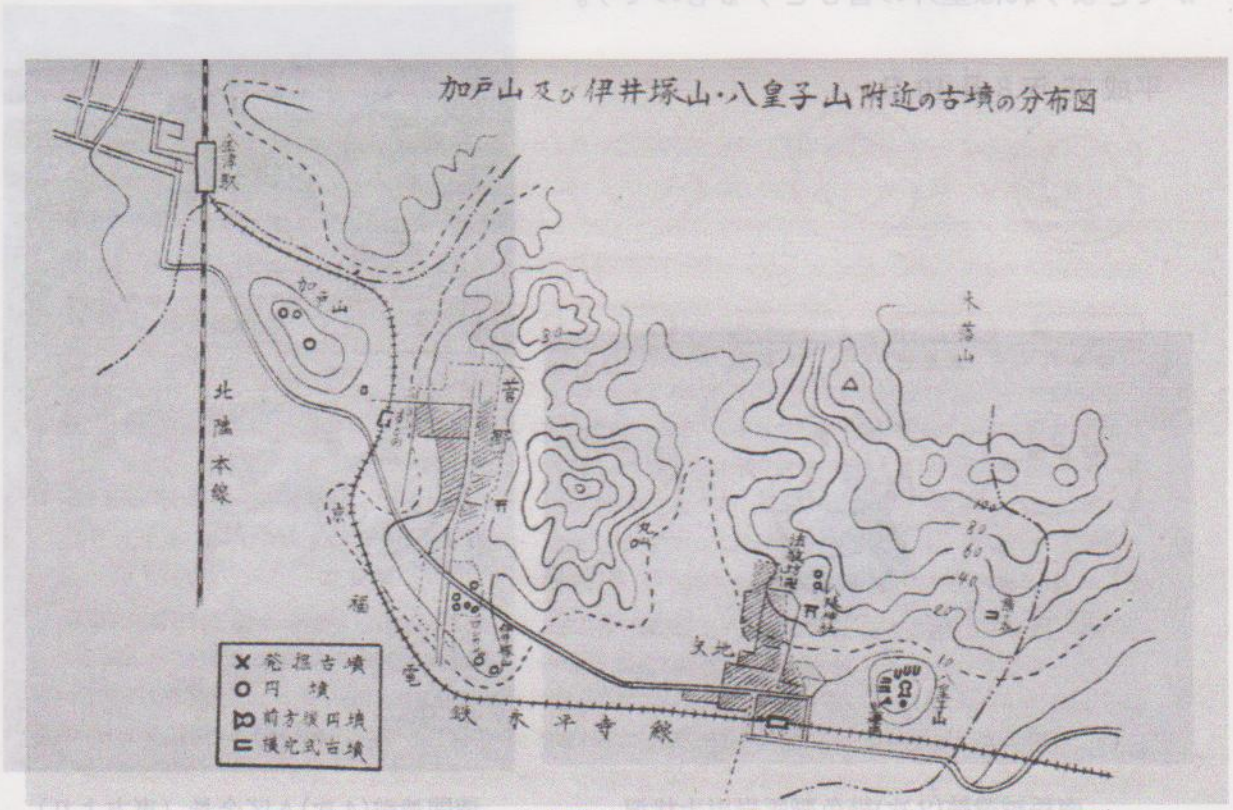
南稲越遺跡(2 次)緑色凝灰岩出土状況



清間遺跡(4 次)A 区全景（東方より）



第１図　明治陸軍測量図



第２図　加戸山及び伊井塚山・八皇子山附近の古墳の分布図（伊井村誌 155 頁）